



発行所
公益社団法人 国民文化研究会
(九州←→東京←→全国)
東京都渋谷区東1-13-1-402
振替 00170-1-60507
電話 03-5468-6230
FAX 03-5468-1470
http://www.kokubunken.or.jp/
E-mail: info@kokubunken.or.jp
月刊「国民同胞」編集部
毎月一回10日発行
購読料 年間2000円

黒上正一郎先生の「お声」

—「日本人のまこと」を求めて—

池松伸典

本会発足の当初から、学びの道筋として大切にされてきてゐる書物の中に、黒上正一郎著『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』（騰写印刷版・昭和五年五月発行）と、三井甲之著『明治天皇御集研究』（原本・昭和三年五月二十日発行）とがある。どちらもやや難解ではあるものの文章に深い味はひがあつて、繙くたびに引き込まれていく。

あると思ひから綴られたのが両書であつたと言つていいだらう。聖徳太子と明治天皇のお二方は、それぞれ「東洋文明」及び「西洋文明」といふ異国の思想学術が流入するといふ歴史の大転換期にお生まれになり、国家国民に進むべき方途をお示しになつた。現代を生きる我々にも大きな示唆を与へ続けてゐる。

昭和三年三月、四国・徳島の黒上先生のもとを、東京高等師範学校二年生の副島羊吉郎といふ青年が四国八十八ヶ所巡りの序でに訪ねた。黒上先生は副島青年に向かつて、初対面の挨拶も早々に月刊誌『日本及び日本人』に連載されてゐた三井先生の『明治天皇御集研究』の一節を紹介された。そこには三井先生の文章と共に謹選された明治天皇御製が掲載されてゐて、その中に次の一首があつた。

燈（明治三十六年）

ともし火の影まばらにもみゆるかな
人すむべくもあらぬ山辺に

この箇所を黒上先生が読み上げられた時のことを、副島先生は九十歳になられて出版された『聖徳恋歌』（東明社）の中で次のやうに記されてゐる（その後、副島先生は、数学、教育心理学の学者として郷里の佐賀大学で教鞭をとられ、教育者として様々に貢献された方である）。

「詩人三井甲之氏の流れるやうな莊重な文章もよかつたが、黒上師の山家慕情の御製の、感動をこめた朗詠には、全身がしびれるやうな感動を覚えた。御製は小学校の読本にもいくらか出ていたようだが、これほどの感動はなかつた。教える人の感動がなかつたからであろうか。生命は生命からのみ産まれるのと同じく、感動も感動によつてのみ湧き出るものである。私は幼い頃、夏の夕暮れにはよく城原川の橋の上でウチワで蚊を追ひながら夕涼みをした。その頃北の山辺に、御製そのままの燈の点滅を眺めて物思いに沈んだものである。師の朗詠は、あの懐かしい故郷の夕暮を呼び戻してくれたのであつた」

三井先生の御文章、それを読み上げられた黒上先生のお声、それを耳にされた副島先生。三者の心の琴線が波長を合はせるやうに共鳴し合ふ出来事だつたに違ひない。この折の黒上先生との出会ひは、九十歳の御高齢になられてご自身の人生を振り返られる中でも、かけがへのない大きな出来事であられたのであらう。

前記の御製を改めて私なりに拝誦してみたい。

夕暮の中に、山の辺りに揺らいでゐる「ともしび」は、そこで生活してゐる人々の心のゆらぎと生命とを感じさせる。炭焼きを生業にしてゐる者、事情により山里に隠るやうに暮す者など、それぞれに様々な思ひを抱いて生きる人々の様相が浮んでくる。それを明治天皇がじつとご覧になつていらつしやる。黒上先生は、聖徳太子の「三経義疏」を通して、中国大陸の釈家の白文をも研究され、衆生を遍く照らす仏の慈愛についても論述されてゐる。それと同じことが明治天皇の御製からも感じられるのである。

こととして第六十七回となる本会主催の全国学生青年合宿教室は、本号折り込みの「ご案内」のやうに、東京都八王子市で開催される。「日本人のまこと」を確かめる研鑽の場にしたいたいものと思つてゐる。

（若築建設（株）東京支店）